

## 栗ヶ沢バプテスト教会 25-10-12 主日礼拝説教 「私は恐れない」詩編 27:1-4 木村一充牧師

本朝お読み頂いた詩編 27 編は、冒頭に「ダビデの詩」という見出しが付けられています。一足先に油注がれた王であるサウル王に仕え、力をつけてその王国をサウルから引き継ぎ、周辺諸民族を制圧しながらイスラエル最大の版図を勝ち取ることに成功した人物、それがダビデ王でした。ちなみにイスラエルの国旗はダビデの星をかたどったものであり、ユダヤ人にとっては今日もなお英雄であります。しかし、そのようなダビデを存在の深いところで支えたものが、主なる神ヤハウエへの信頼でした。この詩を書いたころのダビデは、すでに人生の絶頂期を過ぎ、老年期に近い年となり、弱さや衰えを感じる年齢になっていました。しかも、家族の中では息子たちの対立があり、さらに息子アブサロムによる叛乱（謀反）が起こされるなど、いくつもの破れがありました。そのようなダビデを支えたものが、主なる神ヤハウエへの信頼でした。そのような背景を踏まえながら、本日の詩編 27 編を読み進めてまいりたいと思います。

1 節を読みましょう。「主はわたしの光、わたしの救い。わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の砦、わたしは誰の前におののくことがあろう。」ダビデはここで主なる神のことを光と呼んでいます。皆さんは真っ暗闇を経験されたことがあるでしょうか。私自身のことを申し上げて恐縮ですが、私が小学校 3 年生くらいの頃でしょうか。二人の兄と近所の仲間で白鳥神社の秋のお祭りに自転車で出かけたことがあります。（現在の東かがわ市にある神社です。ローカルな話ですみません）16 キロほど離れた瀬戸内の白鳥町にある神社です。山から下に下って海辺の町に行くわけですから、行きは下り坂で楽です。午前中に出発してお昼過ぎに神社に着きました。いろいろな催しがあり、お店もあって夢中で時間を過ごしているうちにいつの間にか夕方近くになっていました。そこで、引き返すことになったのですが、帰りは上り坂大変です。あつという間に日が暮れて、真っ暗になりました。私の生家と白鳥神社とのほぼ中間地点に母の実家がありました。そこで、私たちは母の実家に立ち寄り、そこから父に迎えに来てくれるように連絡をとったのです。そして、私のように体が小さい者は父のバイクの後ろに乗せてもらって家まで帰りました。今から 60 年近く前で、しかも田舎ですから街灯などありません。真っ暗な山道を、唯一の灯りであるバイクのヘッドライトをたよりに、父の背中に捕まって上って行ったあの時の体験を私は今も忘れられません。本当に怖かった。光の一番の働きは「闇を照らす」ということです。暗い道を歩む時、光なしで目的地に着くことはできません。神が光であるということは、神が私たちの人生の歩みを導いて下さるということです。初めて教会の門をたたいた 20 歳のとき、私の中には漠然としたあせりや不安がありました。これから先どう生きていくか、何をも目指して生きるべきか、いわば人生の目標や指針が見出せずに、もやもやした思いがありました。今思えば、私はあの頃、自らの生きるための確かな指針、人生という荒海を航海するための羅針盤を求めていたのだと思います。

それは、すぐに与えられるものではありませんでした。しかし、1 年、2 年と礼拝生活を重ねていくうちに次第にわかってくるのです。自己中心の生き方ではなく、神さまに喜ばれるような生き方をすること、自分のタラントを神さまのために用いることを神さまは喜ばれる。結果的に、それが他者をも喜ばせることになることがわかってきたのです。

1 節の後半には「主はわたしの命の砦」というみ言葉があります。砦とは何か。外敵からの攻撃を防ぐための建造物のことです。「石」という漢字が下にあるように、パレスチナではこのような砦は石で作りました。土台として石垣を重ね、城壁を石で固めることで外敵からの攻撃を防いだ。さらには、敵に攻め込まれた時、この砦の中に逃げ込みました。わが国の戦国時代で言えば、砦とは本丸とは別に建てられた小規模な城のことで、出城などと呼ばれたものです。そこに逃げ込めば、ほっと一安心という場所、それが砦であります。ダビデはここで「主はわたしの命の砦」と宣言することによって、この方のもとに逃げ込めば絶対的に安心、安全だと言い切っているのです。前任教会で長く役員（執事）をつとめられていた一人の壮年の方の証詞を思い出します。その方は、30 代でサラリーマンをやめて自営のお店を始められました。商売を始められたのです。しかし、不慣れな仕事を始めた当初は何かとたいへんで、夫婦関係もぎくしゃくし始めた。そのような中で先に奥さまが、教会の礼拝に出席されるようになりました。それを聞いて、「ならば自分も」と決意して、奥さんと一緒に礼拝に出るようになられた。そうして、夫婦でバプテスマを受けられたのでした。そのときの気持ちは、まさに「駆け込み寺に飛び込むような思い」だったといいます。その方にとって教会は駆け込み寺となったのです。慣れない仕事の中で、頭の中は商売のことです。家に帰っても仕事の話が持ち込まれ、ややもするとプライバシーが無くなっていたかも知れません。そのようなご夫妻にとって、日曜礼拝における牧師先生の説教や、聖書のみ言葉が慰めや励ましになり、また強く生きよという激励のメッセージとして聞けたといいます。いいじゃないですか。教会が駆け込み寺になって一向にかまいません。このように、さまざまな面で教会が人々の「心の砦」になることを願ってやまないのであります。

続く2節を読みます。「さいなむ者が迫り、わたしの肉を食いつくそうとするが、…」とあります。この「さいなむ者」が誰を指しているかは、明らかではありません。反旗を翻した息子アブサロムのことか、それともたとえばペリシテ人のような外敵なのか、それとも他の人が定かではありませんが、ダビデはこの時、自分を滅ぼそうとする敵が身近に迫っていると感じていたのです。続く3節に「彼らがわたしに対して陣を敷く」という言葉がありますから、明らかにここでは戦争のことがイメージされています。しかし、ダビデはたとえそのような戦いに直面し、敵が自分に向かって戦いを挑んできても「わたしの心は恐れない」というのです。「恐れ」とは何でしょうか。それは、私たちの安全や生命を脅かす者が現れ、あるいはそのような危険な事態に直面した時に生まれるマイナスの感情のことです。恐怖を感じると、それに対して体が反応することもあります。顔面蒼白になる。冷汗が出てくる。心拍数が増え、体がふるえる。しかし、ダビデはここで「わたしには確信がある」と述べて、「神に信頼すること」で、この恐れに打ち勝つといいます。神に信頼することで恐れを知らない者になる。それは、詰まるところ死をも恐れない勇者になるということです。なぜ、信仰は恐れを取り除くのか。それは、神が既に勝利をされているからです。女優の樹木希林さんは2018年に75歳でお亡くなりになりましたが、晩年にはガンが全身に転移していつ死んでもおかしくないお体だったそうです。しかし、彼女はそのような現実を少しも感じさせない強さをもって役者としての仕事をこなしました。死が恐ろしいなどと思ったこともない、それが彼女の口癖だったといいます。本当の強さはここにあるのではないのでしょうか。つまり、否定的なもの、ネガティブなものを受け入れ、吸収して、それを無力なものにしてしまっているのです。投げ飛ばされる数が多い人ほど受身が強くなり、柔道が強くなる。失敗の数が誰よりも多い人がだれよりも成功する。今回のノーベル生理学賞を受けた阪大教授の坂口志文先生も、奥さんと二人三脚でもくもくと実験を繰り返した研究者だったといいます。イエス様もまた、ご自分の死を受け入れ、十字架への道を歩まれました。そして復活された。否定的なものを吸収して、苦難を乗り越えようではありませんか。

そして最後の4節です。「一つのことを主に願い、それだけを求めよう」先ほど、聖歌隊のメンバーに歌って頂きました。「一つのこと」とは、「第一の」という意味です。願いごとは数多くあるが、その中で優先順位をつけるとしたら、まず一番に「主の家に宿ること」だということです。主の家に宿るとは、神の客になるということ、すなわち神のもてなしを受け、保護を受け、感謝をもってこの方に従うということです。本日はお読み頂きませんでした。この後の5節に「主は、…わたしを幕屋の奥深くに隠してください」とあります。中東の砂漠地方では、もし誰かが敵に追われている場合、その人が、誰であれテントを張って滞在している人の幕屋の中に入り込めば、その人はそれ以上追われることはなかった。安全になったといいます。主の宮に宿るとは、何よりも神さまの守りの中に入ることでした。私たちを最終的に守ってくれるものは、この世の地位や学歴、あるいは富やほまれではありません。そうではなく、神さまです。主の愛が私たちの心と体を包んでくださるとき、私たちに本当の喜びが与えられるのです。この詩の4節以降で、主の家に宿ることの目的が書かれています。

その一つ目は「主を仰ぎ望む喜び」を味わうことです。以前の口語訳聖書では「主の麗しきを見る」と書かれていました。その喜びは、心地よい状態、心が満たされた状態のことを指しています。私たちの心が満たされるのは、神の恵みにふれた時ではないでしょうか。主の家に宿ることで、主に近づくことができるのです。

その二つ目の目的は、主の前で礼拝をささげ、主に向かって賛美することです。たしかに、礼拝はどこでもささげることができます。神は霊であるから、礼拝するものが霊と真をもって神のみ名をほめたたえる時、そこは、礼拝の場所になります。しかし、ダビデは、礼拝をささげるのにもっともふさわしい場所は「主の幕屋」つまり、神の家である神殿だと告白しています。ダビデは主の契約の箱をエルサレムの幕屋に安置しました。その子、ソロモンはそこに神殿を建てました。神殿を建てたのは、そこを聖別するためです。そこに神が住まわれると信じているのです。

私たちは、この朝日曜礼拝をささげるためにこうして教会に集っています。ここでは、二つの聖別がおこなわれています。第一は、一週間の時間のなかで、特定の時間を切り分けて神さまのために捧げているということです。第二は、礼拝堂という場所を選びとってこの教会の中へ足を踏み入れていることです。そうすることで、自らを聖別し、神に近づこうと考えているのです。ダビデは命のある限り、主の家に宿りたいと告白しています。それは、そこに神が臨在すると考えていたからです。私たちは、日曜日ごとの礼拝を通して古き自分に死に、新しい命を頂いて、礼拝のたびに造り変えられているのではないのでしょうか。来週の日曜日は特別礼拝がおこなわれますが、神さまはそこでも新しい出会いを与えてくださいます。毎週毎週ワクワクするような思いで神と出会う。主の家に宿るとは、そのような恵みと喜びを、自分の体で味わうことなのです。

お祈りいたします。